

下 澤 明 夜 4 年 演奏学科 声楽専修

研修先 サンタ・マルゲリータ・リグレ国際声楽セミナー

イタリア（サンタ・マルゲリータ・リグレ）

●研修概要

- (1) 研修機関 : サンタ・マルゲリータ・リグレ国際声楽セミナー
- (2) 研修日程 : 7月27日～8月21日
- (3) 担当教員 : Luisa Maragliano

●講習会について

講習会はサンタ・マルゲリータ・リグレ芸術協会が主催し、市内にあるヴィラ・ドゥラツツォという名の施設で行われた。

ヴィラ・ドゥラツツォはジェノヴァ大学の所有物で、小高い丘の上にある。また海の近くであるため、庭やレッスン室からは青々とした海を一望することができる。

講習会中に、オペラフェスティバルが開催され、今年はG. Verdi の『Trovatore』が上演された。もちろん観るつもりでいたが、公演の日程が変更になり、観ることができなかった。

今年は例年に比べ受講生が11人と少なく、そのため当初予定していたロザンナ・リッピ先生は参加されず、私はルイーザ・マラリアーノ先生のクラスになった。

受講生は日本人9人、ドイツ人1人、アメリカ人1人と日本人が多かった。また、私以外は30歳前後でイタリアやドイツに留学している方が多く、水準が高いため、最初は怖気付いていたが、一緒に受講できて、とても勉強になった。

●レッスンについて

レッスンは講習会中に日曜と休日を除いて毎日(計15回)行われ、マラリアーノ先生のクラスは午前に発声、午後に曲という形でレッスンしていった。

人数が少ないため、発声に30分、曲を1曲～2曲と、たっぷりレッスンを受けることができた。

一週目

まず最初に受講生の声を聴くためにオーディションが行われた。

私はG. Donizetti 作曲オペラ『Don Pasquale』のアリア *Quel guardo il cavalier* を歌った。この曲は歌い込んできたので、自分が出せると思っていた。しかし、いざオーディションとなると、周りの方々のすごい演奏に圧倒され、萎縮してしまい、思い通りに演奏することができなかった。とても悔しかったが、落ち込んでいる間もなく、次の日からレッスンの日々が始まった。

午前の発声では最初にハミング、MI、MOで発声したあと、スタッカート、アルペジオ、アジリタ、半音などのパターンを教えてもらい、その中から自分でやりたいものを選んでやった。

初日のレッスンでは、オーディションの動揺もあってか、発声をするときに、何を気をつければよいのかわからず、「これでよいのか」という不安でいっぱいであった。マエストロはそれを感じ取ってか、「怖がらずに、楽しんで歌って」と気をほぐして下さったり、言葉付きの発声では、窓から見えるきれいな景色をマエストロが小さなフレーズにしてくださったり、私は強い、私は若い、私は綺麗など、自信がでるようなフレーズを作って下

さり、そのフレーズを口にすることで、何となく不安が減った気がした。

午後のレッスンでは、様々なアリアを見ていただいた。どれも共通して言われたことは、「もっと元気よく」ということだ。私の演奏は発声での不安もあり、どこか思い切れないところがあったため不安気なものになっていた。しかし、アリアは歌う人物のキャラクターを含めて演奏されるべきなので、強弱や音程を正しく歌ったとしても、そのキャラクターが出なくては意味がないというのだ。

マエストラは長時間のレッスンでの疲れも見せず、実に明るく、活気があった。私はどうにか明るくしようとしたが、マエストラの足下にも及ばなかった。

指揮者であるファブリーツィオ・カラーイ先生のレッスンでは、歌曲やアリア、ミサ曲をみていただいた。レッスン中は強弱、奏法など、たくさんのことを言われるので、それを表現するのに必死で、曲がどのように変化したかわからなかったが、録音したものを聞いて、はっきりと違いが見えた。レッスンを受ける前に比べて、曲に表情や奥行が生まれ、立体感が出ていた。

講習会が進むにつれ、最初にあった緊張や不安は段々と消えてきて、調子が戻ってきた。すると、マエストラもそれを察し、発声の注意をして下さった。「No、もっと高く」とおっしゃってマエストラが歌って下さった。最初、私は音程が低いのかと思い、音程を調整して発声していた。しかしマエストラからの反応は変わらない。これではいけないのだとわかりつつも、何が違うのか、どうすればよいのかわからず、喉で調整してしまい、次第に喉が痛くなってきた。

朝から夕方まで毎日レッスンを受けたり、聴講してきて5日目となると疲れがたまってきたのか、喉が変になりはじめた。マエストラも疲れがたまったらしくお休みされたため、その日の午後のレッスンはなくなった。

二週目

日曜日の一日でうまく疲れが抜けなかったのか、月曜日は発声をしている間に頭がくらくらしてきたため、午後は休むことにした。アパートで休んだり、海をボーッと眺めたりして、身体と耳を休ませた。

翌日(火曜日)は体調が戻ったのかレッスンを受けることができた。

今まで音程を気にするあまり、喉声になり、すぐ喉が痛くなっていたので、この日は音程を気にしないでおなかの支えをきちんと使って発声した。するとマエストラは「進歩したわね」と言って下さった。そして「もっと高く」と言っていたのは、ポジションのことで、支えをしっかりとってポジションを高くすれば、自然と音程もあがるということがわかった。

今日からドイツ人の受講生が加わった。彼女は趣味で歌をやっているらしい。そのため、曲をたくさん歌っていた。その演奏を聴いていると、発音などは、んーと考える時があっが、演奏する姿は自信に満ち、発するパワーはすごいので、「彼女の歌」として成立している気がして、今、私に足りないもっているのではないかと感じた。

日が進むにつれ、ポジションの高さを意識できるようになってきたが、喉のくせがすぐにはとれず、苦しい日が続いた。

午後のレッスンでは、ファイナルコンサートに向けて選曲をし始め、私は C. Gnoudeau 作曲、オペラ『Romeo et Juliette』のアリア Je veux vivre を歌うことになった。この曲は

途中でしっとりした部分もあるが、全体的にテンションが高い。そのためマエストラは歌う前や、間奏の際にたびたび「楽しく」とおっしゃった。曲のもっている明るさと、マエストラの言葉があっただけか、今までにないくらい明るく歌うことができ、マエストラも他の受講生も驚いていた。

土曜日のレッスンでは、今まで受けてきた中で、一番厳しいレッスンであった。

今までは、怖がらずに歌っただけで褒められたり、ちょっと違っても何も言わずに聞いてらした、今日はちょっとの違いも、とことん「No」とおっしゃった。こんなに「No」と言われたことがなかったため、最初はマエストラに嫌われたのかなと思ったが、よく考えると「上手くなりなさい」ということなんだと気が付き、嬉しかった。ラスト1週もがんばろうと思った。

三週目

3週目になり、お互いに慣れてきたのか、月曜日の発声ではマエストラに、「顔の中のあたっているところはいいから、その声を身体の外に出しなさい」と具体的なことを言われた。外に出そうとして喉に力が入ってしまったため、これは違うと思い、どのように外に出すのかを尋ねたら、「横隔膜を使って」と答えて下さった。

すると何回かは横隔膜を使って外に出すことができ、マエストラが「Brava」と言って下さった。今までのレッスンの中でこんなに真正面にマエストラと向き合ったことがなく、あっという間に発声の時間が終わった。

午後のレッスンは *Je veux vivre* のいつも出来ない箇所(二点ハから二点イまで半音を含む上行型でチェンジもあるフレーズ)を取り出して、そこを重点的にみていただいた。最初、言葉を取って歌い、音を確実にいいとこれにあて、次に母音で歌って、最後に子音をつけて歌った。すると、気持ちいいところで歌うことができマエストラに「Bellissima」と言っていただけた。

火曜日にマエストラは突然「コンサートでデュエットもしましょう」とおっしゃり、受講生は慌てて曲や相手をさがした。私はルームメイトと Mozart 作曲、*Le nozze di Figaro* から *Che soave zeffiretto* をやることにし、その日の午後、マエストラに聞いていただいた。マエストラは「練習の必要があるけどいいわね、やりましょう」とおっしゃった。本番は4日後である。なので、昼休みやレッスン後、休日に相手の方と練習して、再度聞いていただいた。練習の甲斐あってかマエストラから「Brave!」と言ってもらえ、安心した。

レッスン最終日の発声の時間。パターンや音域によっては、まだ喉で調節してしまうところがある。

しかし発声をしている時に「これは違う」と自分の発声が変わると気がつけるようになり、マエストラはそのことを察して、発声がおかしい時に、すかさず助言をしてくださった。

午後は明日のリハーサルということで、演奏順に歌った。そこにはマエストロ パスティネやその受講生、事務の方もいたため、レッスン時の倍近くの人が入って、すっごく緊張した。

ソロは、引込まずに積極的な演奏ができたと思う。そして演奏順が、一人の演奏を挟んで、デュエットというものだったので、ソロを歌い終わって興奮しているのを、切り替えなくてはならず、それが大変だった。

リハーサルが終わるとマエストロに「よかったわよ、明日も頑張る」と言っていた。マエストロは最初のオーディションの時とは違う印象を持ったらしく、びっくりしたような顔で「いいね」と言って下さった。

翌日、コンサートは17時からだったので、朝ゆっくり起き、ストレッチをして体をあつためたり、顔をつくったりと本番に備えていった。

本番の日にコンサートをするホールがわかったり、何時からホールに入れるのかわからなかったりしたあたりが「イタリア」らしく、それで成り立ってしまうのがすごいと思った。

本番になり、自分の番が来て、いまの自分に出来るものをだしきると決め、舞台にのぼった。途中でアクシデントがあり、これからの課題がたくさんみえた演奏であったけど、憶病な演奏にならなかったことは、この講習での成果の一つだと思う。デュエットはホールの響きが見方をしてくれたのか、気持ちよくハーモニーをつくれ、本番に一番いい演奏ができた。

自分の番が終わり、講習仲間の演奏を聴きに行った。みんな普段のレッスンにまして気迫があり、声や雰囲気圧倒された。

レッスン全体を通して、ポジションの高さや、支えの大切さ、アリアを歌うときのテンションの大事さを学んだ。そして、私が逃げ腰になった時や、決めどころの前にマエストロがよく言っていた「Guerra(戦い)」という言葉。この意味を考えたとき、「歌う」ということは自分自身との戦いであるのではないかと思った。

この言葉は受講生の間で合言葉になり、本番前にもこの言葉で気合いを入れた。

歌っていくということは、毎日戦い続けるということ。日々の戦いの中で成長していきたい。

最初に予定していた、ジャンフランコ・パスティネ先生のレッスンはマラリアーノ先生のレッスンがないときに行こうと考えていたが、実際講習が始まると、気力、体力共に使い切ってしまう、とてもレッスンに行ける状態ではなかったため、実現しなかった。非常に残念である。

●レッスン以外のこと

オペラの稽古を見学することができた。

稽古といっても指揮者がきたのが四日前、演出家は3日前で、少ない時間なかで、プロの音楽家たちが作品をつくりあげていく様子を見ることができた。

演出稽古を見学して、歌手が稽古の時から聴衆を意識して立ち振舞っていたこと、一つ一つの姿が美しいこと、空間を大きく使っていたことを感じ、私も研究しなければならないなと思った。

見学していたある時、事件が起きた。前日の音楽稽古に来ていた歌手の一人が、体調不良を訴えて降板した。

このオペラフェスティバルはアンダーキャストをとっていないため、マエストロ・パスティネは急いで代役を捜していた。そして「こうゆう時にチャンスをつかめるように、オペラを勉強する時はアリアだけでなくスコア全部を勉強しなさい」と強くおっしゃった。

その後、どうにか代役が見つかったようで、安心してらした。

チャンスはどこにあるかわからない。そのチャンスを掴むためには普段からの準備が必要であることを目の当たりにした。

●ディクシオン

イタリアに行ったらイタリア語ディクシオンが思う存分勉強できると意気込んでいた。しかし先生方からは、明らかに発音が違うところを直されただけで、あまり深いことはやらなかった。そのかわり、ある晩、オペラに出演される日本人の方に、ディクシオンをみていただいた。子音の扱いや、母音の長さを丁寧に教えていただいた。いい響きに入ると、すごく響いて、声に高さや深さがあった。そして詩としての朗読の時と、文章を実際に音に乗せる時は、母音の長さや色、子音のスピードを調節するなど、音の高さや長さを加味して発音の工夫が必要であることを学んだ。一回だけのことであったが、内容の濃いレッスンであった。

●練習について

講習会中の練習は、レッスンをしていない部屋を使用出来たり、アパートでの声だしも可能であったため、不自由しなかった。しかし、毎日密度の濃いレッスンを受けた後に練習出来る体力は残っておらず、デュエットの合わせ、ソロの練習を数回しただけであった。

●宿泊施設について

アパートを二人でルームシェアした。受講先であるヴィラ・ドゥラッツォから徒歩20分弱と、丁度いいところにあった。アパートには家具や洗濯機、食器が完備されており、フレスコ画が書かれたベランダには、トマトとバジルが植わっていて、それを自由に収穫することができた。ベッドルームが二つあったので、プライベートが守られ、窮屈に感じることにはなかった。ルームメイトもとてもいい人で、毎晩のようにいろんな話をして交流を深めた。食事は、近くにスーパーで買い物をし、ほとんど自炊をした。

●その他

毎日のようにルームメイトや受講仲間と留学のことや、オペラに関してなど、いろんな話を聞くことができ、とても参考になった。

その中で印象的だったのが、レッスンの受け方である。

彼女が言うにレッスンは、先生から「No」と言われた発声と「Giusto」と言われた発声では、何が違うのか、自分はどうしたのかを、自分自身で発見し、技術を身に付けていくもので、先生はそれに付き合ってくださいる人であるということ、であった。

今までの、先生に言われたことをやるというレッスンの受け方とは違ったので、どうゆうことかわからなかったが、連日のレッスンや聴講の中で、その積極的なレッスンの受け方がどうゆうことなのかわかった気がして、3週目の後半はそのようにレッスンを受けることが出来たと思う。

●研修をふりかえって

レッスンを受けてきて技術を自分のものにするということは出来なかったけれど、今回の研修で、イタリアでしか味わうことのできない経験をたくさんさせていただきました。最後になりますが、このような機会を与えて下さった学生生活委員会の先生方、学生課の皆様、ご協力いただいた先生、支えて下さった友人、家族に心から感謝いたします。本当にありがとうございました。